

●シンポジウムテーマ

「地域のしあわせ」

ロータリーのある街、あることとは…?

「奉仕の胞子とは」●第1部

ガバナープレゼンテーション

RI第2500地区

ガバナー 小船井修一

シンポジウムをやろうという中で、我々のロータリー、或いは地域社会に関しておさらいをしながら議論を深めていくという段取りになったわけです。この1週間の準備の中でパソコン3台使いまして、どうなるか判りませんが、基本的にプレゼンテーションをさせていただいた後に、パネラー2人をお呼びし、私と3人で2時間皆様と共に我々の地域社会を考えていこうと思っております。



自身こそが地域社会の主役になっていくべきではないでしょうか。

そこで今日、4つのお話をさせていただきます。1つはロータリーの遺伝子と時代を超えた原則。これはロータリーの中の私個人としての職業奉仕という事についてお話させていただきます。ピチャイラタクル会長のメッセージを先ず確認していただき、種を播く人、それがロータリアンだと私の共2500地区の考え方、そして始めよう笑顔の種播きという形でのプレゼンテーションをさせていただければと思います。

北海道の東半分、利尻・礼文から3泊4日で来られている方達がおいでになるとご紹介させていただきました。その中でまず北海道の現状について考えたいと思います。道内に212の市町村があります。その中で札幌という街が、北海道の中でただ1つ輝いています。我々の2500地区はどのようなだろうか？例えば北は稚内から南は広尾、釧路、根室さまざまな地域の市町村の中で元気な街もあるかも知れませんが、基本的には同じ構造的な悩みをもっているのではないのでしょうか。勿論、官が中心になりながら北海道経済を支えてきた構造が、札幌という街を大きくして来たわけです。小林ガバナー(RI第2510地区)が居られたら大変失礼ですが、そういう意味では我々共通にアンチ札幌という気持ちがあると思います。私は札幌で商売をさせてもらい少しは札幌の人からお金をいただいています。私は地域経済の中での現状をお話申し上げました。もう一つはその現状の中でパラダイム、要は構造が変わってきているのではないのでしょうか。我々にとって大事なことは今までの予算が脆弱で、国債もどんどん発行し、日本がそういう意味で土建国という形の中でのインフラ政治の時代は、もう終焉しつつある。そういう意味でいうと我々自身が官や、あるいは行政に頼っていく時代から自分達お一人一人の経済人が、或いは農業、水産、林業に携わる方達は、我々民です。そういう民が主役になっていく中での経済を我々は維持しなくてはならない。そういう時代が来ます。その上で、私にとってロータリーとはなんなのだろうと考えます。生意気なことは余りいえませんが、ロータリーの遺伝子、歴史を学びながら、1905年にポールハリスが造ったこのロータリークラブが、大きく飛躍しながらも21世紀に突入した中で、今日会員増強セミナーに参加いただいた方はご理解いただける通り日本ではロータリークラブの会員数が減少している現実、これについて我々はどういう風を考えていけばいいのかと考えた時に、ロータリーの我々

自身こそが地域社会の主役になっていくべきではないでしょうか。

そこで今日、4つのお話をさせていただきます。1つはロータリーの遺伝子と時代を超えた原則。これはロータリーの中の私個人としての職業奉仕という事についてお話させていただきます。ピチャイラタクル会長のメッセージを先ず確認していただき、種を播く人、それがロータリアンだと私の共2500地区の考え方、そして始めよう笑顔の種播きという形でのプレゼンテーションをさせていただければと思います。

ポールハリスの自叙伝「ロータリーの道」

(Rotary flows as the great river)より

「大河は無数の支流の集まりであり、その支流のそれぞれにはまた無数の小川、溪流が流れ込んでいる。この小川や溪流の水は、大河の流れに入るべく、丘を下り山を下ってやってくる。ロータリーの成長もまたこれに似ており、ロータリーの今日の姿があるのは、多くの国々の自己



研鑽につとめる無数のロータリアンのおかげである。」

基本的にこれはポールハリスが小さなグループから大きなロータリーという大きな川の流れになっていた歴史の背景だと思えます。また未来に対してその川をどうやって流し続けるのかということで未来を語っている部分でもあります。そういう中で今日このプレゼンテーション前半の部分はRJW(ロータリージャパンウェイヴ)田中毅さんというパストガバナーが作られた資料を編集させていただいたものであることを皆様にご報告させていただきます。

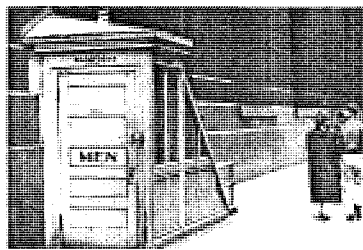
1905年2月23日ポールハリスとシルベスター・シールはシカゴ市ディアボーン街127Nにある事務所に行きそこで彼らを待っていたガスターバス・ロアとハイラム・ショーレーの4名で最初のロータリーの会合が開催されました。ロータリーは殺伐とした大都會の中で、お互いに胸襟をひらいてどんなことでも語り合える友人をつくるという目的で発足しました。親睦と会員の発展を目的とし、親睦を保つために一人一業種制度と定例の会合を定め、1906年1月に制定されたシカゴ・クラブで、

1. 会員の事業上の利益の増進。
2. 社交クラブの性質状、通常付随する親睦その他の事業の充実が定められています。

そういう所が最初のロータリーの草創期の話であります。

この社会奉仕概念の導入、翌年の話であります。1906年に入会を勧められたドナルド・カーターは物質的相互扶助を批判して入会を断りました。社会に対して何らかの貢献をするべきであるというドナルド・カーターの提案を受け入れて、1906年12月に改正されたシカゴ・クラブ定款には「シカゴ市の利益の振興を図り、会員間に市民としての誇りと忠誠の精神を培う」という項目が追加され、ここで始めて社会奉仕の概念が取り入れられました。これは有名な公衆便所の運動ですが、1907年のポールハリスがシカゴ・クラブ会長に就任し活動方針を『奉仕』に大きく転換しました。シカゴ・クラブの会員状況、他都市へのロータリークラブ設立、地域社会の奉仕活動の展開を提唱しました。

この写真は1909年シカゴ・クラブが行った最初の社会奉仕活動であります。市民団体の代表を集め連合公衆



便所建設委員会を設立し、シカゴ醸造組合と百貨店組合の妨害を受けて着工まで2年がかかり、1909年に市役所と公立図書館の横に2つの公衆便所を設置することが出来ました。アーサー・フレデリック・シェルドンは有名な方ですが、職業奉仕概念の導入をされた方で、ミシガン大学経営学部修士課程で販売学を専攻したアーサー・フレデリック・シェルドンは図書販売のセールスマンを経て1902年にシェルドン・ビジネススクールを開校して販売学を教えました。1908年シカゴ・クラブに入会し、直ちに情報拡大会員長に就任して、兼ねてから考えていた職業奉仕の理念をロータリーに導入しました。有名な話ですが、1911年ポートランド大会での「He profits most who serves best」 「もっとも奉仕する者、最も多く報われる」ある意味では奉仕をする者に対してのモットーとしてこれは採択されております。ロータリーには2つのモットー即ち理念が有ることを忘れてはいけません。その1つは「He profits most who serves best」職業報酬のモットーである利益を適正配分することによって事業が発展することを説き、それによって業界全体の職業倫理高揚を目指すものです。

もう1つは「Service above self」という社会奉仕、国際奉仕におけるボランティア活動のモットーでも

あり弱者に対する人道主義的活動の必要性を説いたものであります。これは職業奉仕理念を巡る論争というこれもまた有名な話ですが、職業奉仕派の人達は本質的なロータリー活動は職業奉仕であり、利益の適性配分、職業倫理高揚、自己改善、理念提唱、個人奉仕であると提言いたしました。一方社会奉仕派の人達は、弱者に涙することが人間の道であり、人道主義的活動、実践活動が重要で金銭的奉仕、団体奉仕になることもやむを得ないと主張した人達です。

これはお互いに一步も譲りませんでした。それが直接的な動機になったかは判りませんが、1917年にライオンズクラブが創設されております。これがそういう意味でいくとこれから説明させていただきます決議23の34これが1923年に決議されていますが、そういう前後ある意味でのロータリーの危機といった状態だったかもしれません。ロータリーとはなんぞやということが公表された時期そういう意味で決議23の34第1条についてご説明させていただきますが、この個人奉仕、団体奉仕といった論争を解決するために、1923年セントルイス国際大会において、職業奉仕と社会奉仕の理念の調和に対して職業奉仕を前提としながらも、一定の条件の元ではクラブの団体奉仕活動を認めたものが決議23の34です。この中で全てのロータリアンは個人生活、家庭生活、事業生活、社会生活に奉仕の理念を適用することと記載されています。このドキュメントの第1条でロータリーの理念は明確に作られています。

ロータリーは基本的には1つの人生哲学であり、自らの利益を求める利己の心と、他人のために奉仕したいという利他の心の間に存在する矛盾を和らげようとするものです。利己的な欲求、他人への奉仕相反する2つの心の葛藤を調和するという奉仕哲学です。そういう意味ではロータリーの哲学は「Service above self」という奉仕哲学であり、「He profits most who serves best」という実践理論の原理に基づくものであります。

決議23の34の第2条ロータリークラブの役割ということも第2条で言われています。1つは奉仕の理論を団体で学ぶこと、奉仕の実践例を団体で示すこと、奉仕活動の実践を個人で行うこと、ロータリーの奉仕と実践を一般の人に受け入れてもらうこと、これが私ども決議23の34第2条であるという風なことでご理解をさせていただきました。職業奉仕、社会奉仕、さまざまな部分で今日大きな問題を抱えながら、昨年の春にアメリカで開催された規程審議会の中で先程申し上げた第2のモットー「He profits most who serves best」の使用停止ということが決議され、そ

れが承認されたということを皆さんはよく記憶あると思います。理由はheという言葉がいけない彼という言葉がいけない、男女の差別の言葉だから廃止するということが原因でありました。ある意味での職業奉仕、個人奉仕というものについての概念の衰退をしていったということです。勿論この職業奉仕から社会奉仕ということで1929年の世界大恐慌の影響で会員が減少しました。1930年に先程のシェルドンが退会します。理由はさまざま憶測があります。彼の退会と目を同



じくして職業奉仕理念が衰退していきます。職業奉仕の理念を学び自らの職場でそれを実践することを前提にしながら、その理念を社会生活に適用する手段として、社会奉仕の実践をしていたものが徐々に職業奉仕がボランティア活動の実践に傾いていきます。31年道徳律の禁止、48年国際ロータリー職業奉仕委員会が廃止され、80年RIの細則により道徳律の文字削除、87年「職業奉仕に関する声明」発表、職業奉仕の理念変更、さまざまな部分の中で1989年「He profits most who serves best」の順位格下げ、第2

モットーとなっております。この変の歴史的な部分でのロータリーが草創期での葛藤の中で1つの流れが今日まできているということ、そういう中で、社会奉仕の活動実践の減速という形での確認、基本的には異論もあるかもしれませんが、こういう風にまずは考えてみましょうと提案させていただきますが、個人奉仕というのは職域、地域社会を巻き込んで活動すること、こういうことじゃないでしょうかという風に皆様にお話をし、そしてクラブの方式先ほど実践例という言い方をさせていただきましたが、サンプルとしての団体奉仕そして既に実施されている団体と重複しないこと。地域社会のニーズにあった新しい奉仕活動を開発すること長期活動は専門機関に委ねること、ボーイスカウトなどは典型かもしれませんが。目的別の募金活動を行うこと、安易な協賛に寄付をしないこと。日本の中でといてもいいかもしれませんが、社会奉仕の中での個人奉仕、クラブの中での団体奉仕の中での考え方であると私は理解しています。

コンテナの話をさせていただきます。今ずっとお話申し上げたのは、97年も前の話です。1905年ポールハリスがある意味ではこんなに大きくなるとは思われない中で、ロータリーというのを創ってみるか、そういうのを創っていく中で、大きくその時代にあっ

た中で大きく成長しました。そういう意味では時代に適応した団体であったと思います。それも総合扶助というお互いの利益を求めよう。仲間の中で自分達の企業をより良くしていこう。それを批判された中で論理的あるいは哲学的に一步上に行ったロータリー、その中で個人、一業一会員という基本的な遺伝子、最初は総合扶助ですから、同業者は必要ないですよ、お互いに同業者の足をひっぱる中での団体ではなくて、足をひっぱらない総合扶助をしていこうという意味での遺伝子

というもの、これについて一業一会員ということについてのある意味でいくと遺伝子は連綿と続いていることについて皆さんご理解頂きたい。もう1つは原則、個人奉仕というものについて我々自身ロータリーの遺伝子そのものじゃないでしょうか、しかし、ロータリーという全世界的に活動されているクラブ活動というのは、ある意味での団体奉仕です。

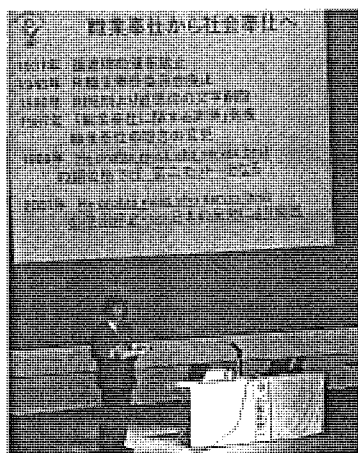
そういう状況については遺伝子だと思います、引き継ぐべきであろうと考えます。そういう中で今年の「Sow the Seeds of Love」ピチャイ・ラタクル会長、今日、田中作次会長からメッセージがありました。

基本的に彼はアジア人(タイ人)であるということです、タイ人であり75才という敬虔の深い1927年生まれですから、彼が言っていること「自愛の種を播きましょう」クラブ奉仕は根、職業奉仕は茎、社会奉仕は葉、国際奉仕が花と、皆さんご存知の「ロータリーの友」の見開きの頁にありますよね、四第奉仕に関わる部分でのロータリーの綱領を植物に例えていく中で基本的にクラブ奉仕、我々自身のロータリーというものは、ポールハリスが4人で集まってクラブを作ったという基本的なクラブができたからこそロータリーがあるのだと、国際ロータリーというクラブのまとまりがあるからロータリーではない、基本的にクラブが我々の根っこである。ルーツである、そういうことがまずピチャイラタクル会長は伝えているのです。また、優先順位でいくと、職業奉仕、97年間の中の初期のロータリーの草創期の中での職業奉仕、個人奉仕という考え方が衰退してきました。しかし、ピチャイ・ラタクル会長は職業奉仕というのが基本的には国際奉仕や社会奉仕を支えている大きな柱なんだということ、茎ということに例えました。

そういうことがピチャイ会長の凄いなーと感じている部分であります。皆さんにお伝えしたいのはいい顔していますよね、いい顔している人に悪い人はい



ませんよね。ある意味では顔のいい人というのは得だと思いますが、素晴らしい顔をした人徳のありそうな顔で、勿論ピチャイ・ラタクル会長はしたたかな政治家です。基本的に政治家としての人間性を高めた中で素晴らしい人格を作られた方である、そういう風な事もお伝えしました。また、ピチャイ会長は、充実したクラブの管理をしましょう、グラスルーツ(草の根)という言葉を使いました。クラブの実施制、主体制というものを重んじる姿勢に転換しました。こういうことも例会で



お会いしました。そして3つ目に職業奉仕、ロータリーの基盤、我々97年間の歴史という中でロータリーはロータリーたる由縁の物ってなんなんだろうかと、もう一度考えましょう、1917年にライオンズができた、我々と何が違うのだろうか。ロータリーというのは21世紀に又、大きな川の流れはポールハリスが言っている小さな川の流れが大きな流れになって海に辿り着く、我々の運命なんだと、川は途切れてしまうのだろうか？そうはならないだろう。ロータリーはロータリーたる由縁、価値があるはずだ、そういう事をピチャイ・ラタクル会長は我々に問題を投げかけてました。

また、先程田中RI会長代理がお話した通り、奉仕に直ちに参加することなくして、誰もロータリーの真のマジックを経験することはできないと言えます。いろんな意味でお金を払う、例会に出席するだけで満足しているようではロータリアンではありません。というような事を会長はお話した訳です。ロータリーが素晴らしいのは一重に、充実した奉仕においてです。奉仕は、献身的な会員においてクラブを充実させるのです。そして積極的な参加は、すべてのロータリアンに、クラブ及びその地域社会における使命の要素をなすという真の所属意識を与える一つの要素です。ある意味は、クラブと地域社会に所属するという意識これが奉仕活動そのものの概念ではないでしょうか。ということピチャイさんは言っていると思います。

そういう中で、もう1つが職業分離の原則に従ってクラブが奉仕する地域社会が反映するようなバランスの取れた会員構成を維持するようクラブに奨励してください。この様子は常にロータリーの力の根源であります。私共ロータリーというのは一業一会員これは今は、50名以下の会員のメンバーのクラブは5名10%ルールです、50名以下は5名、50名以上

は10%同じ業種でも良いですよ、一業一会員の制度というのは崩壊したんじゃないかという方もいます。しかし私はまだ、それを守っていきましょうという気持ちがある。同時に我々地域社会の中で、ロータリーはその地域を代表する地域を公正するメンバーが集まる場であるという風なことに私は皆さんとお話させていただいています。例えば商工会議所に学校の先生がいますか、看護婦さんいるでしょうか、お医者さんいますか、業種というものが集まった場じゃないから、

地域を代表してないじゃないですかと、そういうお話をさせていただいた感じでもあります。そういう地域を代表するいろんなさまざまな業種の人達を集めようという意識を持ったクラブが我々なのだ、これは我々にとっては職業奉仕あるいは職業分類というものの考え方の中に積極的にロータリーだからこそできる事、そういう風に皆様にもお伝えしたつもりであります。

次に我々2500地区の取り組み、ロータリーと地域社会を考える1年にしたいと思っております。この212の地域の中で私共東半分は極めて、札幌という光の部分の中で陰の部分特に釧路は「衰退する街釧路」と日本経済新聞に書かれてしまいました。これからもっと環境が悪くなっていく、環境ってなんなんだろうかって言ったら、今までの我々がずっとやってきた流れが、ある意味ではそれ以上に行かなくなってくるし、そういう時代の中で、我々自身がロータリーのさまざまな職種をもった方達が集まる場、それが地域を代表しているんじゃないですか、その地域を代表するロータリーが地域社会に対して、どう我々は貢献できるか、奉仕できるか、その奉仕も我々自身が職業奉仕であり、個人奉仕であり、そういうことをやっていく為にどうしたらいいでしょうか、又、やるべき団体であるでしょう。もう一つは「ロータリーの時代を越えた原則」、変わらなくていけないもの、一業種一会員、個人奉仕さまざまな部分で他の団体とは違う差別化をしている。そういう歴史の中で我々は違うんだという部分について確認していくことが我々の衰退をしていくといわれている会員が減っている。それは我々にとってそういう時代に適応できてないからだ、時代に適応できてないのだったらそれは衰退して解散するか、基本的には我々自身にロータリーというものが若々しく成長していく団体なんだということについてもう一度確認していくとい

うことが私にとっての役割である。そういう風なことでの時代を越えた原則を学ぶという形の1年にしたい。我々は地域社会の種播きはロータリーの責務ではないでしょうか。種播きそれはアクションだと私はお話ししています。種を播かなければ何も出てきません。そういう意味でいくと我々はアクションをしている、地域社会に対してアクションをしている。我々ロータリアンの仕事じゃないでしょうか。勿論皆さんの会社でやられている事、決議23-34の中で個人生活、家庭生活、社会生活、自分の会社の中での職業人としての生活、さまざまな部分で地域社会で自分が持っている顔は違うんです。

自分の会社だけでは歴史的な部分で否定されているのです。職業倫理を含めた中でもっと大きな部分、広い意味の中で我々個人奉仕を考えた方がいいのではないのでしょうかということも提案させていただきました。自主性、主体性とは「リスクテイク」を自覚した個人からスタートしますということもお話しました。誰かがやるからやろう、誰かがやるんじゃないか、これやったら俺損するかもしれない、これを言ったらあいつはバカだと言われるかもしれない。そういう嫌だから言わない、やらない、御神輿の後ろについていく、そういうことが許される時代は終わったと思っております。基本的に自立した個人としてのある意味で主体性を持った職業人として我々自身がリスクを背負っていく時代、これが今日我々が立っている場所だと私は思っています。地域社会で一人一人のロータリアンが種を播くことは、最初は小さくても大きな結果を生み出すという希望を持つ事です。個人奉仕というのは小さいから、団体でやらないとダメだと、そういう意味でいくと私はノーですよ、なぜならビートたけしが言っていました。「赤信号みんなで渡れば怖くない」そういう意味では倫理的な部分で、皆でやれば怖くないというリスクをおいたくないからそんな事を言っているんです。一人のロータリアンが種を播く、最初は小さくても大きな結果を生み出すんだという希望を持つ事が我々個人奉仕のスタートラインじゃないでしょうか。これは私の問題提供させていただいた部分であります。地域社会に貢献する事はあらゆるロータリアンにとって、その職業を通して個人の地域、業界との関わりを通しての責務であるとの自覚が必要です。地域社会、自分の会社さえやっければ個人奉仕なのだ、社会奉仕なのだという事ではいい

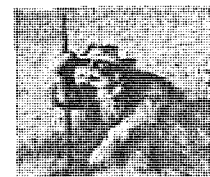
のでしょうかという事です。ロータリークラブは例会を通して、種を播く人材を育成する場でもあります。例会を楽しく、楽しいという事はどういう事が笑いが出て、漫才を聞くのが楽しいか、私は、それはちょっと違うと思う、いろんな意味での自分が刺激を受けながら、自分にとっての足元である自分の人生、職業、家庭生活、さまざまな部分で刺激を受ける事が楽しさ、私はそう思うんです。

「勉強になりました。」勉強になりましたという事について私は楽しさを感じる。そういう事は私は楽しい例会と私は思っています。種を播く人材を育成する場というのはそういう所だと思っております。これも1つの問題提起でありました。シンポジウムをこれからやっていきます。私達が住む地域社会の取り組みは今の時代に大事な事だと思っております。

シンポジウムを通して、地域に関する課題を参加の皆様と共に考える事が大事だと思っております。個人奉仕、職業奉仕、社会奉仕を実践する土壌が私達の住んでいる地域社会です。我々がある意味でいくと国際ロータリーの中で財団にお金を出すことも奉仕です。しかし、我々の根底にある足元であるピチャイ・ラタクル会長が、今日の田中作次さんの方からお話が合った通り、タイでの自分の足元の、自分の住んでいる場所での、子供の奉仕活動という中で、ロータリーマジックを研究しています。いろんな意味で我々の足元は地域社会です。皆さんの住んでいる町、市町村の住んでいる方達の場所が地域社会。その土壌、地域社会をより「幸せ」＝「笑顔」を増していく「種」(シーズ)「胞子」を播かなければなりません。胞子と云ったら小さいものです、小さなことでいいんです大それたことを考えなくてもいいと思います。

ここで皆さんに12,000文字だと思っております。ジャンジオノというフランスの作家、1950年代に亡くなった方ですから相当昔の方です。映画で、「川は呼んでいる」というフランス映画であっ

木を植えた男



たはずですが、その中で「木を植えた男」というのを書いています。内容について若干お話しいたします。フィクションです地中海気候の中で冬場は厳しい寒さになる地域で、作者は荒廃した人の住まない土地に水を求めてある羊飼いに会った。そういう中で、その羊飼いが小さな袋を持ってどんぐりを一つ一つ丁寧に調べて、よい実と悪い実を分けていく。ある絵本の方から私持ってきました。一粒ずつ心をこめてどんぐりを植えていった。「想像は連鎖反応を起こすも

「奉仕の胞子とは」

ガバナープレゼンテーション

のよ」結論の方ですけれども、大分中を抜きましたけれども、簡単に言ったら砂漠のような荒れた土地が基本的には森になり、いつも乾いているはずのいく筋かの小川に水が流れているのが見えた。30年後なのです。彼が最初に会ったときの羊飼いが30年後に又お会いしたときには森林地域に変わった。地域自体が荒廃した地域から、水が流れて川に流れるようになってきた。そういう話を私の方として渡しております。

ここで「木を植えた男」の解説文をご紹介します。

ある人が真に並外れた人物であるかどうかは幸運にも長年に渡ってその人の活動を見続けたときに始めてよく判る、もしその人の活動がたぐいまれなる高潔さによるものであり、少しのエゴイズムも含まず、しかも全く見返りを求めないものであるならば、そして、この世に何かを残していくものであることが確かなら、あなたは間違いなく忘れがたい人物の前にいることになるでしょう。本当に世の中を変えるのは権力や富ではなく、又、数と力を頼む行動や声高な主張ではない、それは静かに持続する意志に支えられた極自然な行いです。力まず目立たず己を頼まずそして急がず、粘り強い何も求めないあなたの行為なのだと私は思う。

朝日新聞でこのように解説されています。この物語はフランス南東部の高地の描写から成り立ちます。作者は一人旅に出ています。無人の丘陵地帯を歩いている。荒れ果て乾燥し、風がたえまなく吹く大地、日照りに水を求めて歩くのち、羊飼いに会う。瓢箪の水をのませてもらい小屋に止まらせてもらった。50代の羊飼いは口数が少ない、だが一緒にいると何故か心が落ち着いた。

木を植えましようと言っているのではないのです。地域社会を小さな持続をしていくということは個人でも素晴らしいことが出来るはずだ。そういう夢を持ちましょう。そういう夢を持つことが我々ロータリアンの使命じゃないでしょうか、又、そういう夢を持つ人達、行動をしている人達をロータリアンにしようじゃないですか。私はそういう提案をしたいと思います。個人奉仕そういう中で我々ロータリアンというのが基本的に卓越したクラブになっていく可能性を我々はポールハリスから頂いているのではないのでしょうか。



2002-2003
ROTARY
INTERNATIONAL
DISTRICT
2500

20
PAGE